

【ポスター発表】

人口減少地域から限界化する定常態の集落実態とソーシャルワーク実践の必要性

—集落の住民とソーシャルワーカーによる支援の考察から—

○ 関西福祉科学大学 御前 由美子 (07258)

安井 理夫 (関西福祉科学大学・04944) 西内 章 (高知県立大学・03704) 小榮住 まゆ子 (椋山女学園大学・06307)

キーワード：ソーシャルワーク 集落の定常態 多様なパワー

1. 研究目的

地域力の創造・地方の再生をめざして地域おこし協力隊・集落支援員制度も活発な一方で、どうしても消滅が逃れられない集落における「むらおさめ」に関する支援も避けられない現状がある。

そこで、本研究は、人口減少から限界化する状況のなかで生活する集落住民が最期まで当該集落での暮らしに向き合い、住民の多様なパワーを活かすためのソーシャルワーク実践について考察することを目的とした。

2. 研究の視点および方法

本研究者は、「ひとつの集落」と集落の定常態を維持してきた和歌山県 A 地区において世帯ごとの個別インタビューから「限界集落」という悲壮感漂うラベルからは想像できない村落住民の多様なパワーがあることを仮説として生成できた¹⁾。

この調査結果をふまえ、本研究では、限界化する集落に必要とされるソーシャルワークのあり方について (1) 日々の生活の不便への支援、(2) 村落共同体として何を維持し何を断念するかという意思決定への支援、(3) 意思決定について批判が起こった場合の住民へのエンパワメント、(4) 「迷惑をかける」ことへの危惧に対する支援、(5) 新たな試みや移住者への支援について考察を行った。

3. 倫理的配慮

本報告における引用・参考文献等については、著作権保護にもとづき、研究目的以外に使用しないことを誓約するとともに、日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守し、先行研究を引用・参照した場合にはその存在を明示する。また、本研究は共同研究であり、「研究発表の要旨集掲載原稿」への投稿内容について、共同研究者の承諾を得ている。加えて、本発表に関連して開示すべき COI はない。

4. 研究結果

これまでの限界集落の取り組みは、支援者主導のもと、集落の活性化やむらおさめを進めたり、支援者の考えにもとづく「あるべき村落や住民の姿」を目指したりする 경우가多かった。しかし、多少の変化を被りながらも従来の形を維持している「集落の定常態」に着目するとともに、住民の個人に内在化されているものの集落住民と共有されず活かされていない力や主体性の把握が必要である。これまでは、集落の活性化や消滅といった

外面的な集落の形に着目する傾向にあったが、外面的には変化していないように見えても、住民個人や集落の中身というものは変化している、あるいは変化していく可能性がある。

集落の思い出や困りごとへの対処法といったこれまでの生活や価値観を大切に、集落固有の伝統的な習慣や生活様式、価値、文化、住民のその人らしさを尊重し、外面的な変化にとらわれることなく、最期までその集落で前向きに暮らしていけるような支援方法の構築が必要であると考えられた。

5. 考察

日々の生活の不便への支援とは、住民の身体が次第に衰えていくことによる新たな生活困難である。自分が健康である時は、集落がもつ物理的な不便さは当たり前のことであり苦にならない。住民の身体が次第に衰えていくことによって、集落の物理的な不便さが増幅する。ソーシャルワーカーは、新たに生じた不便さと向き合う支援が必要である。

村落共同体として何を維持し何を断念するかという意思決定への支援とは、集落共同体が実施してきた行事や活動への意思決定を支援することである。人口減少により集落の行事や活動を継続することが難しくなるため、ソーシャルワーカーが取捨選択の話し合いに関わることである。

意思決定について批判が起こった場合の住民へのエンパワメントとは、同じ集落で生活していても、集落の将来についてみんなが同じ考えであるとは限らないため、住民だけで統一した意思決定することは容易ではない。ソーシャルワーカーは、意見の相違を住民とともに分かち合い整理する支援を展開することが必要である。

「迷惑をかける」ことへの危惧に対する支援とは、昔は集落における互助は当たり前であったとしても、人口減少により住民同士の関係性が変化すると、あえて他者からの支援を断ることがある。

新たな試みや移住者への支援とは、限界集落化する集落の状態と対峙し、これまでとは違う発想による集落の取り組みや移住者と交流しようとする思いを受け止め、ソーシャルワーカーが支援することである。

ソーシャルワークの方法そのものに目新しいものはないが、どのようなエンパワメントを行うのかという点については村落の現状や住民の意向などを尊重しつつ個別に考えていく必要があるだろう。その内容をある程度集積して比較検討すれば、そこから限界化する集落に求められている支援のあり方を新たな視座で説明できるようになると考えられる。

—引用・参考文献—

- 1) 御前由美子・安井理夫・西内章・小柴住 まゆ子 (2023) 「人口減少地域から限界化する集落における定常態の集落实態とソーシャルワーク実践の必要性—和歌山県 A 地区におけるインタビュー調査から—」『関西福祉科学大学紀要』23, 27-38.